

「神話の源流『宮崎』で、地球人を」

宮崎国際大学  
学部長補佐・地域連携センター副長

ウオーカー・ロイド

# 目次

- 一 自己紹介 ー 生い立ちについて
- 二 日本での体験
- 三 宮崎人への進化
- 四 宮崎と仕事及び宮崎の文化について
- 五 宮崎と日本に対する希望と期待
- 六 コロナ・少子高齢化・グローバル化に対応する日本と宮崎の将来への展望

## 一 自己紹介 ～ 生い立ちについて

社会がグローバル化していく中で、宮崎の社会と文化は次第に進化していくでしょう。本日の講演はコロナ禍の中で、宮崎のグローバル化をどう実現していくのかを考える良い機会であると考えます。宮崎に移住した外国人の体験と観点から宮崎人、特に宮崎の若者の地球人化を考察します。前半の自己紹介を通して、これまで生きてきたグローバル社会と当時の時代背景について触れながら、日本での体験と私自身の宮崎人への進化について述べます。

後半では、宮崎に対する思いと期待について話していきたいと思えます。まずは自己紹介です。

### 3 学歴

- 1973 St. Anne's Parish Elementary School (ロンドン)
- 1976 St. Teresa of Avila School (ニューヨーク市) ※カトリック教会により維持される教会の学校
- 1985 Bronx High School of Science (ニューヨーク市) ※宮崎で言う大宮高校など
- 1989 Wesleyan University (コネディカット州) ※コロンビア大学
  - 1987 同志社大学 (1年留) ※Associated Kyoto Program
- 1990 同志社大学 ※特別留学生 (教育の哲学)
- 1994 立命館大学 ※国際関係学科 ※京都府名誉友好大使に就任 (現在に至る)
- 2007 University of Sheffield ※日本学 (日本の言語と文化)

振り返ってみると私はグローバルな人生を歩んできました。イギリスとアメリカの小学校、グローバルな街ニューヨークの高校、米国コネチカット州や日本・イギリスの一流大学で学ぶことができたことに感謝しています。そしてそのことを可能にしてくれた母親、友人、親戚、同僚などの方々にも大変感謝しています。私が今日抱いている人生観やグローバル化の重要性に対する意識の高さは、これまで体験してきたさまざまな国の異文化交流と教育の賜物であると考えます。グローバルイゼーションは現代社会における最近の現象であり、テクノロジの急速な進歩、国際旅行の促進と加速、ICT、グローバル通信ネットワークの

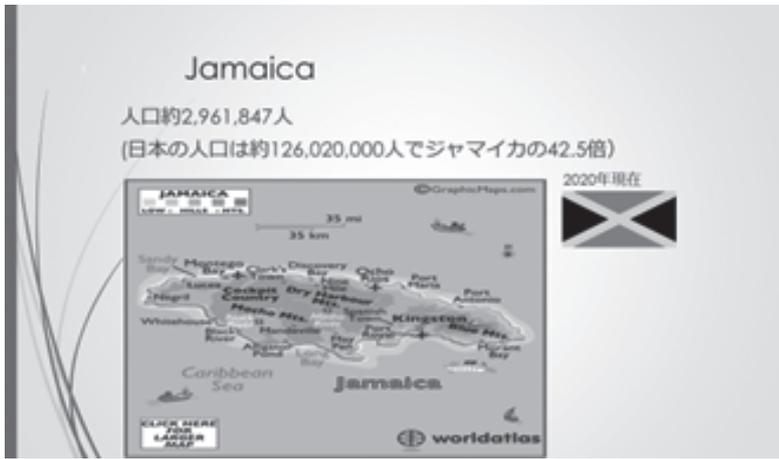
### 4 来日して分かった大事なこと

## 自分自身の歴史と文化を大切にすることの重要性

発展、そしてテクノロジの進歩によつて経済が相互作用し、地球規模で発展してきたといわれています。実は、宮崎国際大学が開学した当時、キャンパス全体のインターネットシステムを導入した大学としては日本初でした。イーサネットケーブルを配線し、すべてのルーターとスイッチを接続する技術スタッフが作業していた姿を鮮明に覚えています。それがほんの26年前であると考え、それがグローバルイゼーションが現代社会の現象と言われる人々がいる理由がわかります。

しかしグローバルイゼーションは、最初の人々がアジアとアフリカを離れ、地球の向こう側に定住したときから始まったともいえます。グローバルイゼーションは、北歐人が近隣諸国を略奪した時や、ドイツ、フランス、スペイン、イギリス、トルコ、エジプト、フェニキア、ローマなどの帝国が土地、富、食物、貴金属、スパイス、彼ら自身の土地では生産できなかった資源を求めて海や国境を越えたときにも起こりました。

そのような侵略行為の意図はおそらく友好的であったとは言えませんが、それらの歴史は新しい文化と現象を生み出し、貴重な遺産を残し、多文化、多民族、多言語社会の創造を促進させたことに違いありません。侵略行為は、ある意味、侵略者と侵略された側の両方の土地を豊かにし、お互いにより豊かな食文化、アイデア、展望、そしてより広い世界観をもたらした場合もあったでしょう。



私はもちろん侵略行為を正当化しているわけではありません。しかし、異国や異文化間の交流から得られる、ポジティブな相互作用は明らかにあると思います。また、年齢を重ねるにつれ、異文化間の交流や文化の融合こそが世界平和を達成するための最良の方法ではないかと確信が深まっています。この考えはあまりにも単純で、楽観的すぎるのでしょうか。

楽観論をさておいて、今日は、これまでに触れてきた諸外国文化や歴史を紹介しながら、私自身の体験の振り返りを通してグローバルゼーションという現象について皆様と一緒に考えてみたいと思います。

私はジャマイカというカリブ海にある小さな島に生まれました。ジャマイカをご存じの方はいらつしやいますか？

ジャマイカは多文化の歴史を持つ、ほぼ300万人の国です。カリブ海の主要経済国の1つでもあり、この小さな島国のGDPは143.6億ドルです。ジャマイカは天然資源に恵まれています。貧富の差が激しく、国の失業率は13.1%です。観光、農業、鉱業、製造業は国内最大の産業であり、ジャマイカのGDPのそれぞれ約30%、6.6%、4.1%、29.4%を占めています。

また、コーヒー(BLUE MOUNTAIN)、世界クラスの陸上選手、レゲエ音楽でも有名です。国の地理は、クリストファー・コロンブスによって発見された1492年以降のスペイン人やイギリス人との出会いの痕跡(コンセキ)を未だ示しています。地名にはスペイン由来の「Ocho Rios」Port Maria、Spanish Town、Monterego Bay、そしてイギリス(特にWhales、Ireland、Scotland)由来のMorgan Bridge、Bangor Ridge、Aberdeen、やCharlemontなどがあります。

ジャマイカは、素敵なビーチやダンズリバーの滝などの観光名所でも有名です。多くの港と果樹園があり、かつては海賊のお気に入りのドッキングポイントでした。また、クールランニングやジェームズボンドの「ドクターノー」、トムクルーズの「カクテル」、などの映画のロケ地としても使われています。

ウサインボルトなどの有名なアスリート以外にも、コリンパウエルなどの有名人や、私のようなジャマイカの血を引いた著名人が多くいます。ジャマイカの多面的な文化は、植民地化、奴隷制、義理の奴隷制から来ています。その人々はウォーカー、クロフォード、ウィルキンス、ジョーンズ、ミラーなどの名前があります。イギリス人、スコットランド人、ウェールズ人の子孫が多く、これらの名字は人々の多様性を反映しています。

昔のジャマイカは家族を大切にし、核家族ではなく大家族が多かったです。母親は8人兄弟、僕は9人兄弟、いとこは数えきれないほどいます。

私のジャマイカでの生活は6歳までした。そのために記憶が薄いですが、

### 古き良きジャマイカ

- 家族を大切にする（じいちゃん、ばあちゃん、叔父、叔母、いとこは全員子育てを助ける
- 子供は家族だけではなく、隣のうちのおばちゃん、おじちゃんに守られ、しつけられ、育ててきた
- 学校の先生は親と同じように子供をしつけ、育てる
- 子供は目上の人に礼儀正しい
- 鍵をかけることなく、洗濯を入れ忘れたとしても、心配しなくても隣の家の人が入れてくれる

政治的情勢など、様々な社会問題を抱えていました。当然そのような社会的な不安定の中では、教育の不平等や不当な労働条件などから脱出し生活の質を向上させることが非常に困難な状況でした。そのため、多くのジャマイカ人は愛する母国を離れ、他国へ移住することを決心したのです。

移住の対象国が多かったのは、第2次世界大戦後のイギリスでした。当時のイギリスは労働者人口が激減したため、50年代から60年代にかけて植民地だったジャマイカなどから多くの移民を受け入れる政策を打ち出しました。イギリスの他にも、アメリカやカナダに移住したジャマイカ人の数も少なくはありません。移住の

今でも記

憶に残っているのは親戚が商売をしていて、とと、家族に囲まれていたこと、また、そんな日常が非常に幸

せだったことです。しかし、多くの植民地がそうであったように、当時のジャマイカも経済格差、不安定な

### 古き良きジャマイカ

- 家族を大切にする（じいちゃん、ばあちゃん、叔父、叔母、いとこは全員子育てを助ける
- 子供は家族だけではなく、隣のうちのおばちゃん、おじちゃんに守られ、しつけられ、育ててきた
- 学校の先生は親と同じように子供をしつけ、育てる
- 子供は目上の人に礼儀正しい
- 鍵をかけることなく、洗濯を入れ忘れたとしても、心配しなくても隣の家の人が入れてくれる

### 生活の質を高める旅に出かける



目的はもちろん、家計の基盤を改善し、より良い教育を得ることで生活の質と家族全体の生活の豊かさを向上させる機会を追求することでした。私の家族は商人であったのでおそらく他人と比較すれば裕福な生活を送っていました、そのような私たちが移住を選択したことも決して例外ではありませんでした。

1973年、その2年前にアメリカに移住した母親を追いかけて、6歳の私は9歳の姉と一緒に飛行機に乗り、ニューヨークに

移住しました。冷戦の真ただ中、様々な社会問題を抱えていたアメリカとの最初の出会いはカルチャーショックの連続でした。まずは食べ物。アメリカンフードとして知れていたもののターキー、KFC、ピザ、マヨネーズなど、ほぼすべてダメでした。せっかく作ってくれた弁当も食べられず、友人にあげていたことも覚えていません。当時住んでいた地域は決して悪い環境ではなかったのですが、歩いて5分先の治安は良いものではありませんでした。玄関の向こうの世界か



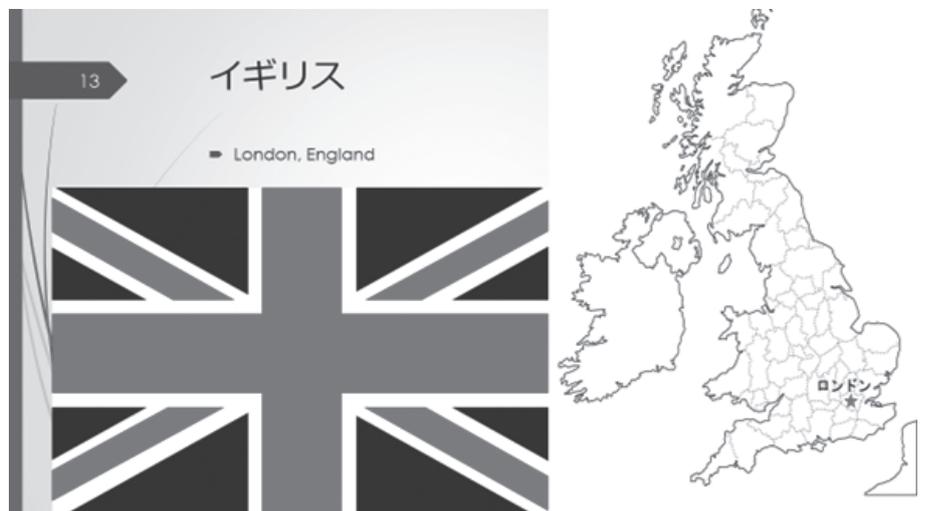
ら守りたい一心で、私たちを厳しく取り扱う母親の過度な保護は、今となっては愛情の裏返しだとわかりますが、鍵っ子であった私たちの日々の自由の無さは耐えがたいものでした。母親や祖父母が不在時には外で遊ぶことができませんでしたし、近所の駄菓子屋さんまで1人で歩いてアイスクリームやキャンデーを買いに行くような自由を楽しむこともできませんでした。

そして、初めてのアメリカの小学校も印象に残っています。ジャマイカから来たばかりの私は、ジャマイカ人としてのふるまいや言葉遣いなどがニューヨークの小学校の子供たちとは対照的だったと思います。その上、礼儀正しい私は先生のお気に入りだったので、すぐにいじめの対象となりました。

たった6歳の私でも、経済格差、目に見えないが確実に存在する国民間のバリアを感じざるを得ませんでした。ギリシャ人のコミュニティ、白人のキリスト教信者のコミュニティ、アジア人のコミュニティ、イタリア人のコミュニティ、黒人のコミュニティで構成されたサラダボウル社会でした。自分と同じ文化を持ち、同じ言語を話す人が集まるコミュニティに惹かれていました。6歳でも、いつかアメリカを出てもっと平等で個人として認めてもらえる包容力に満ちた環境に住みたいと本能的に感じとっていました。そして、移住してから約6か月後、母は私たちをイギリスに送り、叔母のもとで生活するという、3年にわたる人生の新しい幕が上がりまりました。

2年ほど前にイギリスに30年ぶりに戻りました。以前と今日のイギリスの姿は若干変わっていたものの、基本的な雰囲気は不変でした。幼児時代を過ごした近所のいろいろな場所にとこたちが案内してくれた時、心温まる記憶が蘇りました。

ニューヨークの生活で感じた毛穴から滲み出るような抑圧は、イギリスの生活では一度も感じませんでした。子どもだった私は実際



の社会情勢をよく理解していたわけではないでしょうが、私にとってロンドンには安全で愛情のある街に映りました。もちろんそれは叔父叔母が私たちをしつかり見守ってくれたことからそう思った思いが持てたと思います。

しかし、その実情は私の認識と大きく異なっていた点が多くありました。その当時のイギリス、特にロンドンには人種差別、貧困に起因する多くの社会問題を抱えていました。一番大きなアメリカとの違いは、イギリスでは凶器を持ち歩く行為がほとんど見られず、身の危険を感じなかったことです。



70年代のイギリスもアメリカと同様に人種間の摩擦から生まれる様々な課題を抱えていました。イギリスの左翼を中心としたファシズムの再出現、黒人や外国人労働者に対する人種差別など、不安定な社会情勢が当時のロンドンなどの大都市の特徴の一つでした。

しかし、子供の目にはそのような社会が写ったわけもなく、当時のロンドンの暮らしはむしろアメリカに比べると、まるで天国のようなものでした。

1976年。イギリスでの生活に幕をおろし、アメリカに帰ることになりました。3年前のアメリカと変わっていいなと思いつつ帰りましたが、残念ながら、初渡米の印象は変わらず、カルチャーショックを克服しながら少しずつ生活になじむようになりました。小学校4年生から大学まで過ごしましたが、大学3年生の時に日本留学ができること知り、逃亡するような気分です。初来日しました。

## 二 日本での体験

初来日ときは、できるだけ先入観を置いてきたつもりでした



## 日本を心から愛する理由

が、いろんな意味でカルチャーショックを受けました。

まずは言葉です。日本に来る前に1年間日本語を勉強しましたが、日常会話はある程度できると思っていました。しかし実際に来ると、緊張のあまり、言葉を発することが全くできませんでした。空港から出て辺りを見回すと、当たり前なことですが、ネオンサインや看板の文字が全て日本語であることに驚きました。読むことも理解することもできず、言葉の壁にぶつかった瞬間でした。この体験で言葉の大切さを思い知らされました。また、日常生活の中で体験したこと、例えば電車やバスの駆け込み乗車であるとか、家が小さいことや密集していることに慣れるまで少し時間がかかりました。

私が住んでいたのは京都市内ではなく、京都市から30分くらい南に下がった城陽市という所です。そのような環境の中で一番嬉しい発見だったのは、京都には結構優しい人が多いということでした。なぜなら、来日の前から京都人は冷たいと言いつたからです。しかし、京都人が冷たいのではなく、京都の文化と歴史に誇りをもっており、そのプライドの高さが冷たさとして見られてしまうことが多いということでしょう。私が京都に1年間住んで学んだ

## ホームステイの体験から学んだ重要なこと

### コミュニケーション

信頼

愛情

貴重なレッスンを多く学ぶことができました。「寛容と人種や国籍を問わず他者を人間として尊重することの大切さ」などがそのほんの一部です。実は、アズマ家が私を受け入れるまでの経緯がありました。これはお兄さんから聞いた話ですが、当初アズマ家のお父さんは、特に黒人を受け入れることに抵抗があったようです。毎日聖書を読み、毎週教会に通う深い信仰を持つキリスト教信者のアズマ家でも、文化の違いなどに対応できるかなど、不安だったため断念しようと思っていた際、留学先大学の学生であったお兄さんがお父さんに言いました。「おやじは聖書の教えを思い出す必要があるのではないか。」その一言でお父さんを説得し、私を受け入れること

ことは、コミュニケーションの大切さ、同じ空間を共有し一緒に生活することから生まれるお互いへの理解や異文化に対する意識の改革の重要性です。異文化を持つについても交流を深めることができれば、お互いに分かち合えるだけでなく、それまでに抱いていた先入観なども取り払うことが可能となります。出会いは全てです。京都人、特にお世話になったホームステイ先の家族は素晴らしい人たちだと思われ、京都人と交流することができたおかげで、私が日本を心から愛するようになったわけです。ホームステイのアズマ家（仮称）からは、人生において

## 自分への誓い

### アメリカに戻っても、日本に必ず戻る

をなるべく避けようとしていました。しかし、ある日、どんなに苦労していいので、分からないなりに分かるまでコミュニケーションが取れるようにならないと、と勇気をふり絞って、毎日お母さんと一緒に辞書を引きながら、コミュニケーションをとるように努力しました。次第にコミュニケーションが取れるようになり、色んな体験をすると、互いに心が開き、家族の一員として受け入れてもらうことができました。その寛大で寛容なアズマ家に変感謝しています。上のお兄さんに大怪我を負わせてもその奥さんが私をハグして「大丈夫だから、安心して」と言ってくれたこと、下のお兄さんの結婚式の司会を頼まれたり、僕の結婚式も挙げてくれたり、先日の

になったそうです。アズマ家と出会えて、非常に良かったと思います。その出会いによって、私は日本を愛することができたと思います。そして、コミュニケーションの大切さも覚えました。人間は人種とか肌の色からできたものではなく、生きてきた体験や環境からなるものだと思えるようになりました。コミュニケーションの問題について言えば、私は当初日本語があまりできませんでした。自信がないため、情けないことに最初の一ヶ月は大学から戻ってきたらすぐに部屋に逃げこみ、日本語でのコミュニケーション

お父さんの米寿祝いに帰っておいでと連絡してくれたり、思い出すと心から溢れ出るほど多くの心温まることを一生忘れることはありません。心を通じ合うコミュニケーションから生まれた信頼と愛情を、今後も大切にしていきます。

そういったアズマ家と出会ったことによって、私はアメリカの大学に戻って卒業したら日本に帰ってくるぞと決心しました。僕の人生において最も大事な1年間でした。大変な体験もあれば、楽しい体験もたくさんありました。

1988年の夏、同志社大学で勉強していた1年間が終了し、帰国する直前に友達から声をかけられ「純ちゃんの応援歌」というNHK連続テレビ小説に出演することができました。これも大変貴重な体験の記憶として深く刻まれています。特に、出演されていた有名な俳優の方々と交流ができ、日本の芸能界の在り方を少しわかったような気がしました。その中でも、山口智子さんの可愛さ純粹さは忘れられません。忙しくて疲れているのに私と一生懸命に会話していたとき、撮影が終わった後も連絡を取り合いました。ご自身の連絡先を教えてくださいました。残念なことにアメリカに帰ったら連絡先をすべて失くしてしまいました。もしかして私が旦那さんだったかもしれないな、と時々思い出しながら昔を懐かしんでいます。



### 三 宮崎人への進化

大学を卒業して2度目の来日から今に至るまでの間も様々な体験をしてきました。特に音楽に関しては、多様な舞台に立つことができたことに感謝しています。1993年に外国人歌謡大賞に出演し吉幾三の「雪国」を歌って受賞したこと、NHKのど自慢に挑戦したこと、宮崎のおやじバンドバトルで優勝したこと、そして宮崎県オペラ協会の「カルメン」や「ヘンゼルとグレーテル」等の舞台に出させていただいたこと、26年間のバンド活動など、様々な形で音楽を通して仲間を作り、宮崎人としての存在を訴えてきました。また、26年間の日常生活における同僚やコミュニティとの交



楽とバレエなどの趣味を通して作った仲間、自治会会長を2期も務めさせていただいたことなどによって、宮崎にすっかり馴染みました。自治会会長に選ばれたことは、近所の方々から深い信頼を得ていることの表れだと思います。そのことを深く受け止め、宮崎に今後も還元したいという気持ちが強いです。

35

## 私と仕事

- 1994年3月 学校法人宮崎学園就任
- 2019年3月 勤続5年周年
- 理事長室書記、学務部係長、学部長補佐、学務課長、総務課長、地域連携センター副長、グローバル・アドミッション・オフィサー
- 現在、学園本部総務部・大学入試広報部・地域連携センター兼務しながら、大学の幹部として、大学の管理運営全般に携わっている。
- 日頃の仕事としては、翻訳・通訳、学生募集、地域連携活動の窓口として連携事業の企画・実施運営及び促進、教員・学園幹部（外国人職員と日本人職員）との懸け橋
- 異文化副コーディネーター・コミュニケーターとして重要な役割を担っている。

2020年2月

36

## 私と日本と宮崎（宮崎国際大学の業務を通して、宮崎・日本に還元する（名誉友好大使の役目））

- 名誉友好大使、異文化の懸け橋
- 異文化に対する意識と理解の進化

2020年2月

流と家庭ができたことにより私はすっかり宮崎市民として生活をしています。

娘たちは現在県外の大学に通っていますが、二人とも長く外国や県外にいても、宮崎には絶対帰ってきますと言っています。いろいろ体験しても最後は宮崎で生活したいと思っっている娘たちの気持ちをすごく嬉しく思います。私自身も仕事や音

たと今でも思います。

宮崎学園に就職して26年目です。昨年度に勤続25周年を迎えました。職務は理事長室書記、大学教務係、学部長補佐、教務課長、総務課長、地域連携センター副長、学生募集担当など、多岐にわたります。現在でも宮崎学園本部に所属しながら、学部長補佐として

36

## 私と日本と宮崎（宮崎国際大学の業務を通して、宮崎・日本に還元する（名誉友好大使の役目））

- 名誉友好大使、異文化の懸け橋
- 異文化に対する意識と理解の進化

2020年2月

仕事を通して日本、宮崎、グローバル社会に貢献していきたいと考えています。そういう志をもって、1993年、面接を受けるためにはじめて宮崎に来た当時は正直なところ、宮崎の地名すら知りませんでした。宮崎を通り越して屋久島に一度は行ったことがありますが、宮崎に来たことはありませんでした。しかし、第一印象は衝撃的でした。「わっ、この景色…」宮崎ってきれいだなと思いました。空港から宮崎市内に走る220号線沿いのヤシの木の南国感や、10月なのに暖かいし、人も温かくて、自然も豊かで、宮崎に来て良かった。

改めて自己紹介したいと思います。私はジャマイカ生まれ、イギリスとアメリカ育ち、国籍はアメリカですが、心は宮崎にあります。そのように私を見ていただけたら幸いです。今後ともよろしくお願ひします。

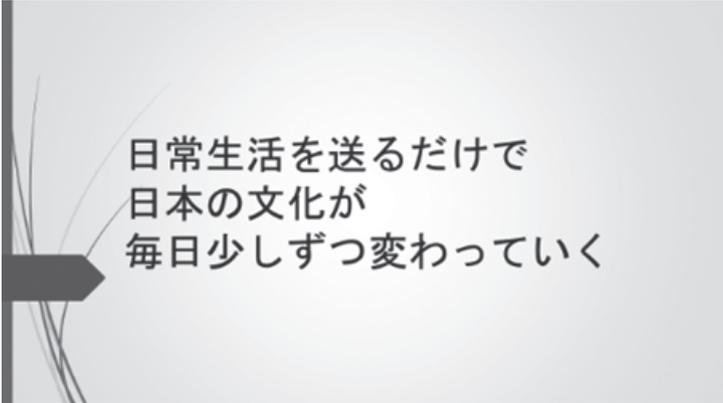
#### 四 宮崎と仕事及び宮崎の文化について

大学の入試広報部と地域連携センターの仕事をしています。大学全般の管理に携わりながら、学生をいかに成長させるか、いかに教育できるかを常々念頭に置いて業務に取り組んでいます。

日頃色々なことをやっているのですが、私の仕事はどちらかというと異文化の懸け橋、異文化コミュニケーションという風に考えています。その役割は本学の教育環境や宮崎県の社会において大変大事なものであると考えます。

私が1992年に立命館大学国際関係学部の修士課程に進学したと同時に、京都府名誉友好大使という新しい奨学金制度ができました。採用された私たちは生涯にわたり友好大使としての役割を担っていきます。友好大使は自らの文化と京都や日本の文化を広く宣伝し、その文化への理解を深めることが役目です。友好大使同様に、学校法人宮崎学園と宮崎国際大学における役目も異文化の架け橋だと感じていきます。

作家B Jネブレット氏は、次のように述べています。「我々は私たちの経験の総計である。つまり、ポジティブなものである」とネガティブなものであろうと、それらの経験は私たちのアイデンティティを確立させてくれるし、流れる川のようにそれらの経験や体験は私たちの現在の人間性そして今後の人間としての成長に大きく影響を与えるわけです。そして私たちは常に変わっていく。」ここではアイデンティティに焦点を当てていますが、実は文化も同じよう性



日常生活を送るだけで  
日本の文化が  
毎日少しずつ変わっていく

質があると考えています。

日常生活を送るだけで日本の文化が少しずつ変わっていると感じます。皆さんもそう思ったことはありませんか？

僕が33年前に日本に来た当時は、街を歩くと「えっ？ マイケルジャクソン」とか「マイクタイソンだ」と指を差されながらよく言われました。今はそんなことはありませんが、当時はどうしてマイケルジャクソンやマイクタイソンと言われなくてはならないのかとうれしく思いませんでした。格好良くて世界のアイドルのマイケルジャクソンならいいけれども、マイクタイソンに似ていないし性格などが全く違うのに、なんで？ と思ったこともありました。しかし、よく考えてみると、その当時黒人の文化に触れる機会というメディアしかなかったわけです。映画・ニュース・スポーツ・音楽といった世界でのイメージが強く、当然子どもなどは私を見て、メディアに取り上げられてる有名人を連想するでしょう。

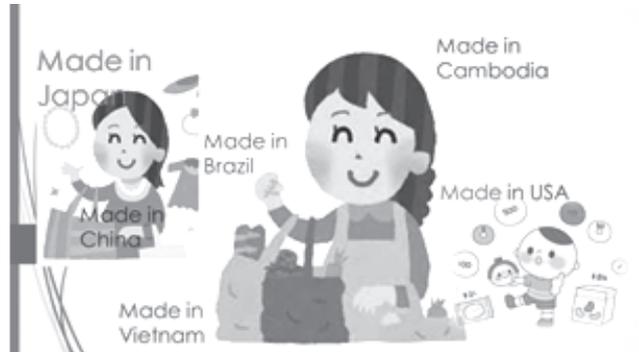
そこで私が何をしたらかというと、自分自身の文化・歴史や故郷の歴史などをしっかり勉強し、私の文化を日本人に説明し理解してもらうように努力することを決めたのです。



台で日本を代表して日本人として活躍していることが素晴らしいと思っただけです。もちろんこれまでも複数の文化を持つ日本人がいますが、私はそれまではそのような（ハーフではなく）ダブルの日本人をあまり意識していませんでした。この時に初めてあつと思しました。ダブルの日本人はもちろんこれまでたくさんいます。ただしこの飛鳥氏のおかげで、日本の文化、日本の「顔」は今後少しずつ変化していくことを意識するようになりました。

日本で生活しているこの30数年間で日本は確かに変わってきたと思います。日常生活の中でも文化が変化する要因がたくさんあります。例えば、買い物をしているとき、いろんなものを買いますが、日本で生産したものなのか、ブラジル、カンボジア、アメリカ、ベトナムなど、どこでできたものなのかを意識しながら買っている人はほぼいないと思います。しかし、様々な国で生産されたものを買っ

30数年前と比較して、日本社会は大分変わってきたと思います。今年残念ながらオリンピックが中止になりましたが、4年前のオリンピックではこういう場面がありました。陸上選手が競う場面です。それがなぜ興味深いかというと、同じジャマイカ人として、もちろんジャマイカ人のウサインボルトが勝って欲しいと思いましたが、それ以上に隣で走っている飛鳥氏が勝って欲しいという気持ちが強かったので、なぜか。飛鳥氏はジャマイカの血を引いていると聞いており、二つの文化を持つ日本人がこのように世界の舞



たり身に着けたり口に含んだりすることによって、それぞれの国の文化や経済、社会に影響を与えるし、私たち日本住民も影響を受けます。そういう意味では日常生活を送るだけでも私たちの文化が変化していくと言えます。

音楽でもそうです。ロック、R&B、J-POP、K-POP、クラシック、ジャズなど、様々なジャンルがあります。これらの音楽は互いに影響しあい、互いの進化に刺激を与えます。

また、情報社会ですから、ニュースを見ると、情報番組を見ると、インターネットを見ると、いろいろな情報を受けることによって、我々のモノの味方や世界観が変わっていくのです。

文化は上記のような要素により変わっていくものであるとすれば、当然日本と宮崎が今後どのようなように変わっていくかについて考えておく必要があります。

文化にはいくつかの要素があると言われています。まずは、同じ社会的な場で交流したりすることによって同じような理解が生まれ、同じような思考や認識。パターンを共有しま



## 五 宮崎と日本に対する希望と期待

### 人生において最も重要な出来事



日本が今後変わっていくのは間違いないです。将来的には私たちのような家族が増えていくでしょうし、外国人労働者も多く移住してくるでしょう。

その時には多くの社会問題が発生する可能性が出てきます。様々な文化の違いから生まれる摩擦を解消しながら、我々は異文化と共存していきます。しかし、日本はこの避けて通れない現実をどういう風に受け止めて準備していくのか、目に見えない文化にどのように対応していくのか、早急に考える必要があると思います。

宮崎もこのような課題にどのように対応していくのかが大変興味深いです。約半年前のことですが、ある地方都市の市長の講演を聴く機会がありました。質疑応答の際に、今後見込まれる外国人労働者の増加に伴って必要となる病院や教育機関や福祉機関等のインフラの整備をどのように考えているのかと尋ねてみたところ、市長が立ち止まったわけです。ほとんど考えていないことが分かりました。言葉（日本語能力）だけでも教育、医療、福祉など、様々な場面においてコミュニケーションが大きな課題となると想定できま

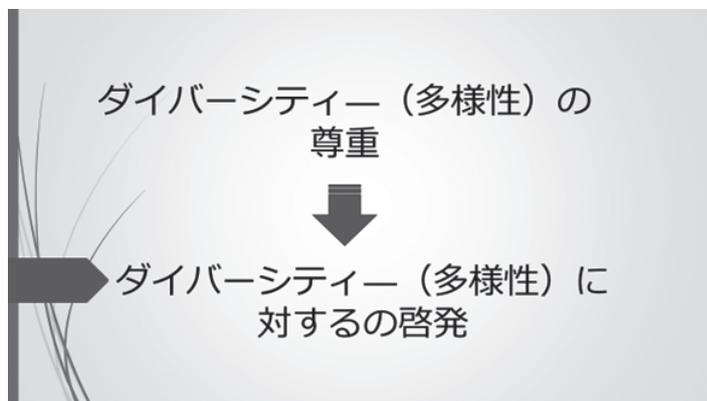
す。他国から労働者を受け入れるのはいいのですが、受け入れ態勢がしっかりとできてきているのか、そして受け入れてからの地域社会での生活をどうすれば保障できるかを真剣に検討する必要があると思われま

## 六 コロナ・少子高齢化・グローバル化に対応する日本と宮崎の将来への展望

少子高齢化のような社会現象から複雑な課題が出てきます。外国人と日本人との共生、私の娘たちのように2つ以上の文化を持つ人の増加、帰化する外国人など、多様な価値観を持つ人を尊重できる環境をどのように創っていくのかなど、様々な課題への解決策を考えなければなりません。多様性豊かな現代社会だからこそ、ダイバーシティ（多様性）を尊重する態度を啓発する教育を促進しなければなりません。

私はジャマイカで生まれましたが、イギリスで育って、現在国籍がアメリカであるけれども、心は宮崎にあるという風に自己紹介するのは、意味があります。それは私自身あるいは私の家族のように多様なバックグラウンドのある人が今後の社会の模範のひとつになるのではないかと思うからです。

世界各地で浮き彫りになった多様性に関わる問題は、幸いにも日本ではまだそれほど発生していませんが、今後多文化していく日本



社会において、十分発生していく可能性はあると思います。

1980年から2014年までの間日本に入国した外国人は約10倍以上増加したとの統計が出ています。外国人人口が今後さらに増えていくことにより発生することが想定できる課題への対応策は、外国人を受け入れるために必要なインフラを整備し、多様性に寛容な社会づくりと子育てを促進することが得策であると考えます。

今、コロナの時代ではありますが、コロナだからこそ私は、子どもが自己と家族を愛し、他者を思いやって社会のルールを守りながら世界で活躍できる人間に育っていかねばならないと思います。そのような子どもを育てる環境を作るのは、私たち親の責任です。多様な社会にしっかりと向き合う健全な育成は、家庭教育を礎に、学校教育を含めて地域社会の様々な側面から考えて取り組んでいく必要があります。

先ほど紹介しましたネブレット氏が述べるように、私たちの体験や経験は本当に私たちの総計であり、私たちのアイデンティティを確立させてくれるのであれば、これからの日本のアイデンティティも変化していくでしょう。その変化がポジティブなものなのかネガティブなものなのかは私たち次第だと思います。

## 地域社会の受け入れ体制は大丈夫？

ます。

私の宮崎人への進化の最大の要因は、おそらく私の家族にあると思います。日本で生活し家族を作り、その家族がアメリカ人とジャマイカ人の文化を備わっている日本人として今から日本で暮らしていくでしょう。

しかし、実を言うと私の先祖にはアフリカ、スコットランド、インド、シリアなど、様々な文化を持っている人がいます。娘たちはそれらの文化を受け継いでいるわけです。豊かな文化とDNAを誇る娘のようなダブルやトリプルの若者がこれからの日本を担っていくわけですが、そのような若者こそが宮崎のみならず、日本全体のグローバル化の鍵のひとつではないかと確信しています。

今後のグローバルな宮崎を実現するためには何が必要かを考えていかななくてはならない時代やってきました。本日のようにこの課題を一緒に考える機会をいただき大変光栄に思います。

私は、今後も仕事や社会活動において、宮崎のグローバルな未来を目指して活動していきます。愛する娘のために、愛する宮崎と日

## 少子高齢、外国人労働者人口の増加、異文化交流、ジェンダーアイデンティティーへの寛容など、日本社会が次第に複雑化していく

- 外国人の顔を持った日本人との共生
- 日本人の顔を持った外国人との共生
- 複数の文化を持った日本人の増加
- 帰化する外国人
- 多様な価値観を持った人たちへの理解

本のために。

話は以上となります。ご清聴ありがとうございました。

これまでの26年、そしてこれからのさらなる宮崎人への進化を  
温かく見守っていただいている皆様に感謝しております。

2020年8月2日